朝日新聞　第3種郵便物認可

# メガファーム 地域を潤す

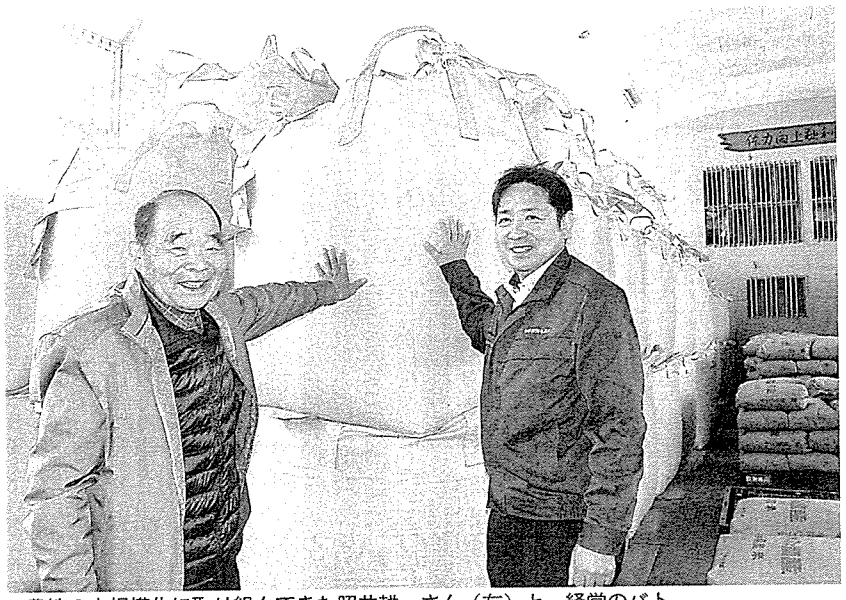
## 変革者たち 岩手と平成 5

### 高齢化や後継者問題にさらされる岩手の農業。そんななか、農地を拡大し続けてきた親子がいる。

「西部開発農産」（北上市）が生産規模を拡大してきたのは、時代の求めでもあった。

個人で農業を営んでいた耕一が、会社を立ち上げたのは1986（昭和61）年。時代は平成へと移ろい、岩手でも農家の高齢化や後継者不足で続けるのが難しく、放置される農地が増えていた。当時40代だった耕一は、そんな農地があると聞けば遠方であっても管理を買って出た。

53㌶から始めた農地はいま、作付面積が約970㌶になった。その広さは東京ドーム200個分を超える。創業者の照井耕一（74）と、現社長で長男の勝也（49）の



農地の大規模化に取り組んできた照井耕一さん（左）と、経営のバトンを継いだ長男の勝也さん。倉庫には手がけたコメが並ぶ＝北上市

## 汗して2代 農地を交換・集約へ

根底には少年時代の貧しかった経験がある。3人きょうだいの長男。8歳のときに父が結核で亡くなった。午前3時半に起きて朝7時まで農作業する生活が始まった。中学・高校でも農業にどっぷりつかって家計を支えた。幼い頃から様々な作物を扱っていたため「あいつは何でも育てられる」と評判になった。会社はいま、コメや大豆などのほか、野菜類や肉牛の生産・加工も手がけている。

「食は生きる根幹。俺は農業に命を捧げる。自分だけ生きようとするんじゃなく、地域にも潤いをもたらしたい」。管理する農地は、地元・北上だけでなく、花巻市や奥州市にも広がり、日本有数のメガファームへと成長した。

「お前は長男なんだから、農業を継がなきゃいけないよ」

勝也は幼いころから耕一に言われ続けた。朝早くから夜遅くまで働く父を間近で見てきた。長時間労働には後ろ向きだったが、いずれは継ぐことになると感じ、大学では農業を学んだ。

93（平成5）年に父の会社に入社し、コメや大豆の作り方を学びながら2012（平成24）年に社長職を継いだ。その頃、会社の作付面積は720㌶にまで拡大し、肥料や農薬を安く大量に購入できるスケールメリットも感じていた。しかし、勝也にはひっかかるものがあった。

岩手でも耕作放棄地は年々増えていた。90（平成2）年に約5千㌶だったが15（平成27）年は1万7千㌶を超えた。管理が行き届かないと、雑草や害虫が増えて周辺の農地にも悪影響を及ぼす。耕作放棄地の管理を引き受けることで会社は大きくなり、地域の農地が荒廃することを防いできた。それでも大規模化によるデメリットが目立ち始めていた。

中山間地域にあったり、あちこちに点在していたりと、作業に手間がかかる農地もあった。区画が小さければ、大型トラクターやコンバインも使えない。受け入れれば受け入れるほど、作業時間や金銭的な負担が増えていくのを勝也は感じていた。

周囲の比較的大きな規模の農家たちも同じような悩みを抱えていた。そんな状況を打破しようと、昨年度から農地の集約化を進めている。創業以来初の試みだ。複数の農家との間で農地の交換を行うことで、いびつに入り組んでいた土地を整理している。昨年度、交換した面積は11㌶に及んだ。

「今までと同じやり方では、やっていけない」と勝也は考えている。平成の30年間で岩手の耕作放棄地は3倍以上に増えた。担い手不足も深刻だ。県内で自営農業に従事する農業就業人口は、90年の15万人から15年に7万人に半減。この間、耕地面積は13％減の15万㌶あまりになった。しかし、西部開発農産の踏ん張りもあり、県内の食料自給率は04（平成16）年以降100％以上を維持している。

Earth to Table　西部開発農産が掲げる基本理念だ。食卓へと届く「食」を生み出している農地を30年以上にわたって保全し、北上の地から日本の食を支え続けている。

＝敬称略（大西英正）

ラグビー・トップチャレ一員が意思統一できていたか一スが出ても対応の早さとキ一た戦略で「上を狙う来季に